

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	市村太郎
論文題目	近世・近代における程度副詞・強意副詞の研究
<p>審査要旨</p> <p>日本語の品詞のうち、いわゆる連用修飾の役割をになう副詞の研究においては、語ごとの意味、用法が多様であり、その一方で同類の語の中ではその意味、用法に共通するところがあるために、個々の語ごとの異同を視野に置いた精密な語誌的研究が必要とされる。その中でも、歴史的研究においては、内省をいかすことができる現代語の研究とは異なり、十分な用例にもとづいた客観的な裏づけが特に強く求められる。</p> <p>日本語の副詞は、一般に、大きな分類としては、様態副詞、程度副詞、陳述副詞の三種類に分けられてきた。本論文は、このうち、程度を限定、修飾する副詞として扱われてきた語群を対象としているが、「だいぶ」「たいそう」などのいわゆる程度副詞の他に、「ほんとうに」「まことに」など、そのはたらきの違いに従い、強意副詞として位置づけるべきものをも含め、近世から近代にかけて、副詞による程度表現として、どのような語がどのような意味、用法上の特色をもって用いられているかを分析、記述したものである。</p> <p>全体の構成としては、序論で研究の目的と先行研究の概要を明確にしたうえで、第一部では、近世中・後期の日本語史資料である洒落本によって、この時期の程度副詞と強意副詞の全体像をとらえようとしている。続いて、第二部では、程度副詞、「だいぶ」「たいそう」「たいへん」などを取り上げ、第三部では、強意副詞として、「ほんに」「まことに」「じつに」などを取り上げ、それぞれ、対象となる時期の広範な資料から採集された多数の用例にもとづいて、類似の用法をもつ語の相互の関係や文体的な特徴などにも目を配りながら、語誌的に各語の意味、用法を記述し、最後に全体の結論を述べている。</p> <p>第一部第一章は、近世中・後期の洒落本を資料として、この時期の程度副詞と強意副詞の全容をとらえようとしたものである。洒落本は 18 世紀半ばから幕末期にかけて、江戸と上方の両地域を中心として作成されており、この間の時期的な変化や地域差を含めて、程度副詞と強意副詞の全容をうかがうことができる資料である。言語資料として時代と地域の違いを適切に反映するように選ばれた 64 の作品にもとづいて作成されたデータによって、江戸では「あまり・いっそ・おおきに・ずいぶん・だいぶ・とんだ・よほど」など、上方では「あまり・いっこ・えらい・おおきに・きつい・ずいぶん・だいぶ・よほど」などが主要な程度副詞、強意副詞として用いられている事が確認され、全体の見通しが明らかにされている。</p> <p>第二部では程度副詞が取り上げられる。第二章と第三章では、それぞれ「だいぶ」と「たいそう」を取り上げ、語誌的な分析が行なわれている。いずれも、中世から現代に至る使用状況がたどられ、形容動詞から副詞としての用法に転じる過程と、その間における特徴的な用法の発生と定着、及び衰退(「たいそう」について)の要因が明らかにされている。</p> <p>第四章では、やや方向を転じて、近代前期の雑誌を資料として、この時期の程度副詞を総合的に概観している。この時期の雑誌の特色として文語文と口語文の両文体が含まれることを生かし、文体と程度副詞の対応関係という視点を含め、どのような程度副詞が用いられているか、包括的にとらえられ、現代へのつながりをうかがう上でも有効な記述となっている。</p> <p>第三部では強意副詞が取り上げられる。「ほんとうに」「まことに」などは、事実であることを強意的に述べるものであり、直接に程度を表わすわけではなく、陳述副詞に近い性質をもつものであるが、程度副詞に似通ったはたらきも持ち、程度副詞の意味、用法を精密に分析するためには、あわせてそれらの語についても十分に検討しておかなければならない。第五章と第六章で「ほんに」「まことに」が取り上げられ、語誌的な分析が行なわれている。「ほんに」は、中世から近世初期にかけての「本当に」という実質的な意味を残した用法から、徐々に強意の用法に転じていく状況がたどられており、その過程で、類似の形態の「ほんとうに」の使用が拡大し、「ほんに」が古風なものとなって衰退することも一体のものとしてとらえられている。「まことに」についても、程度副詞</p>	

氏名 市村太郎

としての機能を獲得する過程と、その一方で、日常的な口頭語とは、やや、へだたりのあるあらたまりの語感を持ったために、挨拶や謝罪などの場におけるあらたまったものいいとして用いられる方向に至った経過がたどられている。

第七章では、近世語までの用法について分析を行なった「まことに」「ほんとうに」に「じつに」を加え、近代語資料における強意副詞が概観されている。「じつに」と「まことに」があらたまりの語感をもち、主として男性に用いられていたのに対し、そうしたかたよりの持たない「ほんとうに」が広く多用され、「じつに」や「まことに」の使用範囲がせばめられていったことが確認され、ここでも現代語へのつながりをうかがうことができる。

本論文は、近世から近代にかけての程度修飾の働きをもつ副詞を広く見渡すという調査と、個々の語についての精密な語誌的研究が並行して行なわれている点の一つの特徴といつてよいであろう。膨大な文献から収集された多数の用例によって、全体が概観されるとともに、意味、用法の微細な違いや、その変化が丁寧に記述されている。程度副詞や強意副詞においては、もともとその語がもっていた一般的な意味から、副詞としての特徴的な色合いを強めて、他の語との区別がはかられることなどが、全体的な傾向として導き出されている。近世の上方語と江戸語における相違点や、文体、性別による違いなどがうかがえるのも、調査資料が多量かつ広範囲に及ぶことや、計量的な判定を可能にするだけの調査方法の裏づけがあることによるものとして、評価できるところである。

個々の語に関する語誌的研究からくむべきものは、なお多いとも思われ、また、より一層、現代語の程度副詞、強意副詞を視野においた研究ものぞみたいところではあるが、精密な捕捉の困難な程度副詞、強意副詞の分析と記述としてすぐれた成果であり、日本語の副詞の史的研究に寄与するところが大きいものとする。

公開審査会開催日	2016年6月4日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高梨信博	日本語学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	上野和昭	日本語学	博士(文学)(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	森山卓郎	日本語学	学術博士(大阪大学)
審査委員				
審査委員				